

金曜の夜になると恒例の同僚の誘いを断って、秀真は一人、珈琲を飲んでいた。
カジュアルな内装とリーズナブルな値段のせいか、店内は学生と思しき私服の若者で溢れている。
場違いな自分を意識してため息をついたとき “若者” の中をすり抜け、彼女が歩いてきた。

GM：次は誰が動きます？ 誰も動かないのであれば、土曜の夜まで時間進めちゃうよ。

譲：(秀真と桐子を指して)ここ二人は、何か連絡をとったんじゃないのかい？

秀真：(桐子に)どっちがシンプレイヤーやる？ (侵食率を振る).....俺でいいか。

桐子：先に集合場所に行ってもらえます？

譲：(いきなり店員になって)いらっしやいませ、「Italian Restaurant YourS」へようこそ~
イタリアン レストラン ユアーズ

秀真：じゃあ、入ってきたのを見て片手を挙げて「こっちだよ」と言うか。

桐子：「あ、はい」すいません、お待たせしましたっ、て感じで。(秀真の方が)年上だしなあ。

秀真：.....悪いな、急に呼び出したりして。

桐子：ああいえいえ、ご飯をオゴっていただけるならそれはもういくらでもっ。

「あの親にしてこの子あり」ではないが、桐子と綾華が従姉妹というのも納得のいく一瞬である。

秀真：経費で落ちるかな.....。

GM：みんなしてセコいキャラばっかかいつ。

秀真：じゃ、適当に注文させた後で 「いや、その.....咲島綾華って、そっちの従姉妹だよな？」

桐子：そうそう。今度ね、ゲームと一緒に行く (声が暗くなる)約束はしてなかった(一同笑)。

英達：約束はしてないね(笑)。

桐子：(立ち直った).....だけど、どうかしました？

秀真：その綾華さん、最近怪我でもしたのか？

桐子：あ 何か、三ヶ月前に事故で。入院してて.....最近退院したんじゃないかなあ。

秀真：.....退院、したんだな？ 元気なのか？

桐子：ん~、私は電話でしか聞いてないけど.....電話の向こうの声は凄く元気そうでしたよ？

秀真：ふー.....ん。じゃ、ちょっと周りを見ながら(テーブルの上に)“書類の写し”をポン、と。

桐子：二枚比べて.....(目を点にして)「んえ？」(一同笑)

GM：いいリアクションだ(笑)。

「 ども、よく分らんのだがな」

三分の一が空になった漁師風パスタの皿にフォークを置いて、桐子が書類から秀真に視線を移す。

仕事柄、文章に目を通すのは速い。二枚の差異に気付いたのだろう、その瞳が真剣になっていた。

「あたしにこんなものを見せる ことは、裏に何かがある、とか思ったりしてます？」

“戦神の斧”が放つ問いの鋭さに耐えかねて、秀真は言葉を濁して“斎木病院”に話題を変えた。

秀真：あ それと.....ちょっと怪しげな場所があっただなあ。

桐子：(話題の急展開に戸惑っている)場所？

秀真：本来なら死んでいるはずの人間がだな、後に生き返る.....という訳の分からない事例が四件五件と続けて起こっている病院があるんだよ。

桐子：.....なるほど。そりゃ、確かに怪し過ぎますね。

秀真：多分、刑事が正面から突っ込んでって調査しても何も出てこないと思うんだがなあ……。

桐子：うん……（話題の方向性にはたと気付く）ゲームライターが調査ですか!?

秀真：UGN に繋がりのある奴、いないかなあ。

譲：アンタがその繋がりを持ってんだよっ！（笑）

秀真：（素っ頓狂な声で）ええ？ 俺そんなもん持ってたっけ。

秀真はプリプレイで「UGN エージェントである」譲に PC 間口^{つなぐり}を結んでいる。

……自分のキャラクターシートに書いた内容はしっかり把握しましょう。

譲：（秀真のロイス欄を指しながら怪しげな発音で）My name is Hojima ユ・ズール Yuzuru.（一同笑）

秀真：あ、あ、っていうことは（譲を指して）俺、こいつのこと知ってるのか！

譲：Year ツ!!

桐子：じゃあ、私がフォロー（笑）。「あの、確か UGN に知り合いがいるって言ってませんでした？」

秀真：（間髪入れずに）あれはパスだ（一同爆笑）

英達：却下されたっ！（爆笑）

秀真：（しばらく考えた後で）……とは言っても他にいないからな。やっぱりアイツか。やれやれた。

桐子：あ、あたし食べてますから遠慮無くっ（逃げ完了）

秀真：……仕方がないから席を立てて電話をかけるか。

譲：（突然）っぴゅゴゴゴ、ゴゴゴ……（我に返って）で、いいの？

登場するのは構わないのだが……どんな呼び出し音だ、それは。

譲：侵食率は（ダイスを振る）10 ツ！ …… GM！

GM：ん？

譲：出目を裏返したいです!!（笑）

GM：（無駄に可愛らしい声で）むりっ

英達：それ、別のゲームだから！（笑）

と言うか、仮に 10 面ダイスで 10 の面を裏返しても、9 が待っているだけである。

秀真：……もしもし、鶴来だ。

譲：（突然声を作って）私だ（一同笑）

そこで スカネタを入れるな。……こんな一言だけで分かる方も分かる方だが。

秀真：やはりかけたのが間違いだったかと思いつつ「少し調べて欲しいことがある」と。

譲：私に？ ……ほう。

秀真：と言うより UGN の情報を持っている奴に協力を依頼したかったのだが（笑）

GM：つまり、お前じゃなくていいと（苦笑）

譲：まあ引かかるけど、聞かなかったことにしよう。で？

別のゲーム 友野 詳氏がデザインした『央 封神』というシステムである。相応のリスクを背負う代わりに、ダイスの出目の裏面を適用するオプションルールがある。ただし、使用するのは 2D6。

秀真： 斎木病院、という病院があるらしい。その病院にだな、死んだはずの人間が後に重体の状態まで回復して退院までしているということが四、五件続いているらしいのだ。

譲：まるで、何か.....レネゲイドに覚醒した、みたいな話だな.....？ そんな話をよく聞かし。

秀真：.....その可能性は、あまり考えないようにしたかったんだがなあ。知り合いの従姉妹がな、「死亡事故」の五日後に「重体」ということで事故の処理が為なされていたらしいんだ。

譲：ん.....電話だけ、というのも面倒臭いな。今、君はどこにいるのかね？

秀真：まさか、来る気じゃあるまいなっ!?(笑)

譲:(笑顔でこめかみぴくぴく).....どういう意味かなっ？

多分、そのまんまの意味じゃないかと。

秀真：しょうがない.....「YourS」だ、分かるか？

譲：ああ、よく分かった。(突然にゆっと出て来て) **こんばんは(一同大爆笑)**

英達:(いきなり店員になって)「Italian Restaurant YourS」へようこそ～ お客様一名様ですかあ？

譲： あ、待ち合わせで。

桐子：じゃあ、席に戻ってきた鶴来さんと、あと黙々とパスタを貪むさぼり喰ちらっている小まい女の子が。

女の子なら、もう少し上品に食べてください。

譲：ああ.....あちらです。失礼。(席について) **こんばんは**。

桐子:(口いっぱいパスタを頬張ってもごもご) **むあー、はじめまして、こんばんは**。

譲：ついで(席を遠ざける仕草)。

英達:(両方に)初対面なのに失礼だあっ(笑)。

確かに、過剰反応も口にパスタを頬張って喋るのもどっちもどっちでじゅーぶん失礼である。

桐子:(慌てて飲み込んで)けほっ、えほっ.....は、初めましてっ。よろしくお願ひします～。

秀真：こちらは宇佐美さんといって、ゲームライターをしている方だ。

桐子：ぴっ、と名刺を出して。「ライターですので、何かネタがありましたらいつでもどうぞっ」

秀真：こいつは帆島..... UGNのエージェントだ。

譲:(すかした口調で)UGNの優秀なエージェント、帆島です。

自分で言い出すと、途端に胡散臭うさんくさくなると思うのは気のせいだろうか？

秀真：.....はあ。話が進まん。ため息混じりに「電話であらかた言ったが」と、調書の写しを二枚。あらかじめコピーをとっていたということで。「とりあえず、やるよ。これはコピーだから」

譲：で、私が調べなくてはならないのは この.....斎木病院？ についての話でいいのかな。

秀真：うむ。表向きは普通の病院ばいからな。それに、俺は鑑識だし.....なら裏からと思ってな。

英達:(妙に明るい声で)とりあえずお前がゴひんしって瀕死にするから、運ばれて行ってこいと(爆笑)

GM：怖ッ!!(爆笑) なんか怖いこと言うんだ(苦笑)

英達：超・手っ取り早いよ(笑)

イってこい 「行ってこい」と「逝ってこい」のどちらなのかは不明。英達.....、恐ろしい子!!

譲:(流して)フッフッフ.....私には 情報:UGN も 情報:裏社会 もある。他には何か?

秀真:他に、は (譲の腕をガシッと掴んで小声で).....なあ、お前、金持ってる?

どうやら、名家の坊^{ボン}のふところは意外にさみしかったらしい。

譲:常時、三万円は財布に入っている。

秀真:(引き続き小声で)UGN って経費として落とせるんだろ? 何とか貸してくれっ。

桐子:二枚目のお皿に到達しておりますっ(笑)

秀真:財布を見ながら「ぎ、銀行に行ってくればよかった.....ッ!」(わなわな震える)

譲:.....あ、“YourS ブレンド”をお願いします。と言いつつテーブルの下で一万円札をそっと(笑)

.....というわけで、水面下^{テーブルのした}で男の友情が展開されたのであった。

秀真:こういうことばかりやってるから、一向に縁が切れないという.....。

GM:激しく縁を切りたがっている口調だな(笑)

秀真:まあ、それはともかく。「ところで、綾華さんはどこにいるんだ?」と何気なく訊いてみよう。

桐子:ん? 普通に学校に通ってるみたいだけど。明日ゲームの催し^{もよお}に行くって言ってたなあ。

譲:.....その前にちょっと伺^{うかが}いたいたいが。何でこの人はここにいるんだ?

秀真:あのコピーの被害者は彼女の従姉妹だ。それに、以前一緒に“仕事”をしたことがあってな。

譲:なるほどね.....“そっち”の人か。

秀真:こう見えてもそういう人なのだ。

桐子:ま、あたしは一介^{いっかい}のゲームライターなので。裏社会がどうのってのは分らんのですけどね。

譲:この場で調べてもいいかな?

GM:ええ、いいですよ。

桐子:(ほのぼのした声で)あ、ウェイターさ~ん。この“びっくりパフェ”お願いします。

GM:まだ喰うのか ッ!(笑)

黙々とパフェを詰め込む桐子を横目に、ラップトップ PC のディスプレイから譲が顔を上げた。
「なるほど.....どうやら、斎木病院とやらは随分前々から UGN の監視対象だったようだ」
前任の残した書類を洗う“運命の導き手”^{フェイト・インジケーター}に関連情報があれば連絡を、と要請して接続を切る。
その片手間でざっと調べた結果 それを見て、譲は皮肉げに笑った。「.....結構な評価だな」

『斎木病院:F市内では最大規模の私設病院で、市立総合病院と同程度の設備・スタッフ。
市内の救急車が向かう、緊急受け入れ先に指定されている病院のひとつでもある。』

そう表示されている隣には、馴染みの情報屋から来たばかりのメールが開かれていた。

『急ぎらしいから、要点だけ先に送っておく。』

どうやら先週あたりにスタッフが十数人、失踪しているようだ。病院側は揉み消しているがな。
失踪者が属する派閥^{はばつ}のトップは女医の目白香奈恵^{めじろかなえ}。彼女も失踪している。奴らの私物が綺麗サツ
パリ消えていることから、ヘッドハンティングだの派閥争いの結果だの、憶測が飛んでるらしいな。
.....とまあ、こんなところだ。女医の履歴書や事件の詳しい情報は、明日にでも。』

GM:.....ちょっとキナ臭い病院ですね。うふふっ。

譲： という話らしいんだが。(声色を変えて) どうかね、私は優秀だろう。ハハハ。

自分で言ったら台無しだ。

譲： UGN もどうやら注目しているらしいが、そちらについてはまだ詳細が分かっていない。

桐子： 怪しい、なんてモンじゃないですよ～。

譲： 他に調べることは？特に何もなければ そうだ、ちょうどいいところだ、君たちにも話を通しておこうか。と、UGN で私が調べている件について、彼らにも語っておきましょう。

GM： ほいほい。“見えざる神の手” についてですね。

譲： FH の“見えざる神の手” なるエージェントが(中略).....で、(早口で)なんと声が支部長とそっくりでぶっちゃけ私は支部長を疑っているのだが多分それはないと思いたいっ。

内部の疑惑をあっさり外部に漏らすとは、とんだ“敏腕”エージェントである。

桐子： んじゃ、(pasta を) もごもごやりながら「今週の.....(もごもご) 土日はですねえ～.....ちょっと取材があるので忙しいかも知れないですけどお～(もぐもぐ)」

譲：ん？ 他に協力を要請したイリーガルもそんなことを言っていたな。

桐子： あ、名刺の方にメールアドレスと携帯番号がありますので、何かありましたら連絡を～(もごもご)。

譲： (名刺を) イヤそうに見て、登録もせずに名刺入れに突っ込む。

桐子： 酷いなあ！(苦笑)

譲：まあ、なかなか関わりを持つことはないと思うが、よろしく。

どうやら、チルドレンだけでなく UGN エージェントの一部も社会適応能力が欠けているらしい。

桐子： (譲の名刺を見て) 名刺、ありがとうございます～ 何かありましたらお電話しますねっ。

譲： 一応イリーガルだし、繋がりを持っておくのは重要だ。手足がひとつ増え.....ん、んんッ！

桐子： (めげずに明るい調子で) あ、いいですよ～いいですよ～いくらでも使ってください、ご飯をオゴってくれるんならいくらでも使ってくださいっ！(未だに食事中)

秀真：(今回の被害者)

譲： 連邦のモビルスーツは化け物かッ!?

桐子： そんな目で見るとなよ!!(爆笑)

そんなネタを持ってくるなよ。.....確かに、この食欲は驚異的だが。

秀真： てな訳で、情報交換したからいいんじゃないかと。

GM： ほいほい。じゃあ、シーン切りますね。

「お会計ありがとうございました、またのご来店をお待ちしております～すっ！」

「ホント、お腹いっぱいごちそうしてもらっちゃって、ありがとうございました～！」

後ろから届く店員の明るい声と、半歩前を歩く桐子の満たされた歓声。

二人分には長いレシートとやたら軽くなった気のする財布を懐にしまい、秀真は心で涙した。

連邦の～ 初めて ングダムと戦った際にその性能に驚愕したシャア・ア ナブルの台詞.....らしい。